

汗で汚れた夏物衣料を扱うことが多くなる時期は、ウェットクリーニングによる事故も多く発生する傾向にあります。
ウェットクリーニングによる事故を防ぐには、その品物が処理に耐えうるかどうかの適切な判断が求められます。今回はその典型例を紹介します。

クリーニング
処理方法
に注意

素材
特性
に注意

監修／クリーニング総合研究所

衣類の状態

ベージュの色地に黒色や白色の植物をプリントしたスカート。クリーニング後、ベージュの色地部分がうす黒く着色した。

じていることから、水に対する染色が不堅ろうであることが推測できる製品であったが、夏物であったため汗などの付着を考え、業者はあえてウェットクリーニングを行った。

原因

黒色の染色がウェットクリーニングに耐えられなかったため、溶け出してベージュの色地部分を汚染したもの。

取扱いは絵表示では水洗いを禁

事故の防止対策

取扱いは絵表示で水洗いを禁じている製品を水処理する場合は、あらかじめ水に対する染色堅ろう度をチェックした上、染色が不堅ろうと判断されるものは、水による



ベージュ色地に黒や白の植物をプリントしたスカート

処理を避けること。特に濃淡の著しい色柄製品については十分な注意が必要。

水を使用する場合の配慮事項

汗の除去に部分的な水性処理やウェットクリーニングを選択する場合には、染色堅ろう度のチェックに加えて、次のような事項に配慮を必要とする。

1. 水による弊害への配慮

洗たく物によっては、収縮、パツカリング（縫い目付近に細かなしわが生じる現象）、移染、色泣き、変退色、各種加工の脱落など、修正不可能な状態に変化することがある。

このため、予備試験などによる確認を厳重に行うとともに、水による処理を行うことで想定される

不都合については利用者の十分な理解および了解を得てから処理すること。

2. 環境配慮

過去にテトラクロロエチレンによるドライクリーニングを実施したことが明らかな洗たく物は、テトラクロロエチレンが洗たく水中に溶出して排出される可能性があるため、ウェットクリーニングを避けること。

3. 素材別の配慮

- ・毛は、湿潤状態で機械作用が加わることでフェルト収縮するため、水洗いの対応がされていない製品に対しての機械力はできる限り小さくすること
- ・絹は、白化しやすいので特に湿潤時の摩擦を極力抑えること
- ・レーヨンは、乾燥時と比べて湿潤状態での引っ張り強度が大きく低下するため、過度の張力をかけないこと。



ベージュ色地がうす黒く着色

■品名…スカート
■素材…麻 55%、綿 45%

■取扱いは絵表示…
（洗濯機可）（漂白不可）（乾燥機可）（アイロン可）

■処理方法…中性洗剤によるウェットクリーニング、自然乾燥、スチームボックス仕上げ

●「衣料管理情報」は全ク連ホームページからPDFをダウンロードいただけます。
全ク連 HP <https://www.zenkuren.or.jp> 「お知らせ」→「衣料管理情報」